
雨宮

ごはんライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨宮

【Nコード】

N2723R

【作者名】

ごほんライズ

【あらすじ】

芸人のAMEMIYAが好きなので、このタイトルにしました。
8000字くらいになる予定です。

「パン買ってこいよ」

「やだよ。自分で買ってこいよ」

「なんだところら。買ってこい」

「やだ」

「てめえ」

兩宮は、不良グループにぼっこぼこにされた。

兩宮は、学校が終わってから、まんが喫茶に行った。

学校でのいやなことが色々忘れられる。漫画を読んてる時だけは、本当は高校生は入店禁止なのだが、オーナーが父親の幼馴染だったので特別だ。

「うふふふ。面白い」

兩宮は、「お尻くん」を読みながら、コーヒーを飲む。

兩宮は小学生の頃、漫画家になりたかった。しかし、絵がヘタクソだったため、夢を小説家にシフトした。小説も漫画も物語という点では共通するので、漫画は小説の研究のためにも読んでいる。もちろん、楽しみのためにも読んでいるが。

兩宮は、ノートをかバンから出して、アイデアをメモし始めた。

オーナーが、ケーキを持ってきた。

「え。これ。オレ、注文してない」

「豆雄ちゃん、今度、すばる文学賞に応募するんだろ。がんばりな
よ」

「あ、ありがとうございます！」

兩宮は勇気百倍だ。ケーキをむしゃむしゃ食べながら、ペンを動かす。

その時、店に不良グループが入ってきた。

「おお。漫画いっぱいじゃん」

「すげえ」

オーナーが駆け寄り、「高校生はだめです」と注意する。

「なんだよ、くそオヤジ」

「ふざけんじゃないよ」

雨宮はそのやり取りを聞きながら、イライラしてくる。オアシスを邪魔された気分。

「とにかく、お引き取りください」

「このやろっ」

「なめてんのか」

不良グループの一人が、オーナーの胸ぐらをつかんだ。

雨宮はさすがにキレた。

「おい。てめえら」

雨宮は不良グループに近づいた。

「お。雨宮じゃねえか」

「なんだ、てめえオヤジ。雨宮はよくってオレたちはだめなんかよ」
不良が、オーナーを殴ろうとした。

雨宮は、口笛を吹いた。

すると、何ということだ。

漫画本から、どひゅひょーと、何かが飛び出した。

「??????」

「お尻くん、悪者をやっつけろ」

「はいよ、雨ちゃん！」

何と、雨宮にはこういう術があるのだ。漫画のキャラを呼び出す不思議な力。

雨宮が「オーナー大丈夫ですか。あとはお尻くんが何とかしてくれます」と言うと、オーナーがたがた震えながら、指をさしている。

「あわわわわわ」

何と、お尻くんが袋叩きにあっていた。

「よ、弱い！ 北斗の拳にすればよかった」

その後、雨宮もお尻くんと一緒にポコポコにされ、オーナーが警察を呼んで、やっと不良どもは店を出ていった。

「うう。雨ちゃん。オレ、悔しい」

「オレだって。うううう」

全身に包帯を巻いた雨宮とお尻くん。オーナーが赤チンを塗っている。

「ちきしょう。あいつらカンベンならねえ」

雨宮とお尻くんは、まんが喫茶を出て、山に登り、秘密の洞窟に入り、ロウソクを立て作戦会議を開いた。うす暗くてひんやりしてる。ちなみに、今、まんが喫茶にあるマンガ「お尻くん」の中にお尻くんはいない。

「お尻くん。あいつら、かなり武器持ってるぜ。マシンガンとか日本刀とかね」

「くうマンガみたいだな」

「小説ではあるけどね」

色々アイデアが出たが、真つ正面から戦ったら殺されるという意見は一致したので、落とし穴を掘って、その上にケーキを置く、という原始的な手法を採用した。

翌日、お尻くんと雨宮は、高校の近くにある空き地に不良グループを呼び出す。もちろん、落とし穴はきちんと掘って上からブルーシートをかぶせ、さらにその上に砂をかぶせた。徹夜でがんばったのだ。

そして、その上にケーキを置く。

「おっ昨日のお尻もいるじゃねえか」

「まさやん。ケーキあるぜ」

「ほんまや!」

不良グループは走ってケーキに突進。

見事に落とし穴にはまった。

落とし穴は十メートルくらいの深さがあった。ガキのいたずらじゃない。完全に殺人を視野に入れている。

「こらーだせー」

「母ちゃーん。こわーい」

お尻くんと雨宮はハイタッチした。

「あとはこいつらが餓死するのを待つだけだね」

「やったね。お尻くん」

その後、雨宮とお尻くんは、殺人犯として逮捕された。すでに、刑務所の中。

薄暗く、ひんやりしてる。いかにも刑務所という感じた。

昼間の農作業があまりにつらく、お尻くんはすでにすやすや寝ている。

しかし、雨宮は、ろうそくの灯りを頼りに執筆に励んだ。今年のすばる文学賞には間に合わないかもしれないが、出所したのちプロ作家になるには、執筆を中断してはいけない。少しでも書かないといけない。

それに刑務所生活が意外と小説に生きる。普段と違う生活をするので、そこが小説に生きる。普段と違うものを読者に見せるのが小説だから、それは当然なのだが。ドストエフスキーも、確か作家になる前、刑務所に入ってる。

月がにこにこ笑ってる。月ががんばるやつが好きだ。

ざああああああああああ。

ある雨の日。今日は農作業は中止である。囚人たちは、屋内で自由によよと言われた。今日は何もすることがない。

ただ雨宮だけは小説をはりきって書いていた。お尻くんはそれが気に入らなかった。

「おいてめえ。くだらないの書いてんじやないよ」

「うるさいなあ。じゃましないでくれよ」

すぐに殴る蹴るの喧嘩になった。

囚人たちが夢中になって観戦する。荒くれ男たちなので興奮しやすい。

「やれー殺せー」

「お尻くんがんばれー」

看守がひまだったのか実況中継している。

「さて、ついに始まりました雨宮とお尻くんの一騎打ち。どちらが勝つと思われませんか。山本さん」

「そうですねえ。お尻くんは小さいから身軽ですし、雨宮の方が大きいからパンチは重い。いい勝負するんじゃないですかね」

わああああああああああ。

ざああああああああああ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2723r/>

雨宮

2011年5月23日13時25分発行